

第73回 公開講座

未完の「水平社創立宣言」

日 時 2013年5月24日（金）13：00～14：30

場 所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講 師 宮橋 國臣（委嘱研究員）

去年は水平社創立90周年の節目の年でした。水平社の発起者西光万吉が「水平社創立宣言」（以下「宣言」）の唯一の起草者であることの論証及び創立前夜の実存解明が、私の課題（※1）でした。それは、創立の背景に駆けこんでいた、西光の不可視の潜熱を捉えきれずにいたことに起因する問題が浮上してきたことを契機としていたのです。その問題とは「宣言」の起草者として西光以外にも人物がいたとする複数起草者説です。以前からの「部落史の見直し」の風潮のなか、この妄説が史実であるかの如く猖獗を極めていたのです。

ところで、「3.11東日本大震災」直後に放映された金子みすゞの詩「星とたんぽぽ」の末尾の「見えぬけれどもある/見えぬものでもある」という表現は原子論的ですが、今回のテーマ及び部落差別の現状にも示唆的ですので、その第二連を援用します。

散ってすがれたたんぽぽの、／瓦のすきに、だァまって、
春のくるまでかくれてる、／つよいその根は眼に見えぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ。

実は数年前の「公開講座」（※2）で、正面に投影された「宣言」を朗読していた時に、「見えぬけれどもある」のを「発見」したのです。宣言文中に「ある」べき文字がないことに気づいたのです。尤も発見という表現は多少大袈裟かも知れませんが、第二次大戦中にヒトラーに暗殺されかかったハンガリーの科学者セント＝ジェルジ・アルベルトの「名言」を次に引用します（※3）。

発見とは、誰もが見たことのあることを、／じっくり見据えた上で
誰一人として考えたことのないことを、／考えてみることである。

さて、「宣言」は「藝術的光芒に燃えてゐる」（※4）と評された日本史上初の人権宣言として「同和」教育関係図書等で語られてきました。今回、指摘する字句の「両義性」も既に言及されています。がしかし、上記名言中の「誰一人として考えたことのない」考察には至らなかったのです。これは自然科学的思考も必要ではないか、といった問題意識の重要性であり、「細部が大きな真実を照らし出す」（※5）ということです。これは元々起草者が意図したと思われるが、過去90年間にそれを考察する研究が皆無だったのです。それ故に、ウイルスのような複数起草者説の侵入を許したのでしょう。今回は「宣言」の字句の問題を通して、演題にある「未完」の意味を提示できれば、と思います。

- ※1 以下『研究紀要』所収 2010年9月 第60号「『水平社創立宣言』文の基礎的考察」／2011年3月 第61号「西光万吉の自己形成」(1)／2012年3月 第63号「西光万吉の自己形成」(2)
- ※2 2006年5月26日「水平社創立宣言の再生」（芸術的可視化を通して人間存在の根源を照射）／2009年9月25日「かくして水平社は生まれた」（西光万吉の宗教的実存と表現主義）。
- ※3 ビタミンCとPの発見者。主著に『科学・倫理・政治』（岩波書店/1966）がある。
◆A discovery is said to be an accident meeting a prepared mind.
◆Discovery consists of seeing what everybody has seen and thinking what nobody has thought.
- ※4 吉井浩存『水平運動発達史』1926年 p7
- ※5 「近世国文学・浮世絵研究家鈴木重三さん」2010.10.23/『朝日』夕刊追悼記事

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。
手話通訳が必要な場合は、5月9日（木）までに人権問題研究室へご連絡ください。

第75回 10月25日（金）13：00～14：30「心は前を向いている」

第76回 11月22日（金）13：00～14：30「ジェンダーと日本の就職制度」（仮題）

会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室



THINK×ACT
KANSAI
UNIVERSITY

関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>